

2025年度

入 学 試 験 問 題

(A 日 程 午 前)

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/6から6/6まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん^①に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」^{しゅうりょう}の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

一次の文章は、東京から徳島へ移り住んだことのある筆者が書いたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日、徳島県内の中山間地域^{*}の町で幹線道路から少し外れた高台に案内してもらった。「ここが町を一望できる場所ですよ」と言われて見たその風景はたしかに「農村風景」ではあった。しかし、ところどころに施設栽培^{しせつさいばい}用の真っ白で四角い建物が点在しており、いわゆる「農村風景」と聞いて思い浮かべるのどかな風景とは違^{ちが}っていた。

このときの感想は、大変失礼ではあるが正直に言うと、「あまり美しくないな」だった。しかしそのあとすぐに「美しさのためにこの風景は存在しているわけではない」と考え直した。農村の風景はその場所の生業^{＊なうりい}の姿、人びとが生きている姿であって、外から来た人間がどうこう言うのも違うと思ったのだ。

ただ同時に、景観研究者としては、この風景が「生活や生業のありよう」を反映したものだからといって、それを理由に肯定したり、良い風景であるといった価値判断をしたりしてよいのかという疑問も浮かんできた。なぜなら、私自身が「美しくない」という感想をもったのも、これまた事実なのだから。ではどうすればよいのか？ 当然ながらすぐに答えがでるはずもなく、「農村風景」の美しさに対するモヤモヤした思いが残った。

(中略)

こうして徳島に住みはじめてからそれまで知らなかったことをたくさん知るようになった。ただ、最初の「農村風景をどう捉えたらよい^{とら}か」という問いは問いのままで心の奥底^{おくそこ}にあった。そこで私にできることとして、まずは耕作放棄^{ほうき}をなるべく減らそうと「地元のものだけを食べる」ということを意識的にやってみることにした。全く学術的ではないのは重々承知であるが、何ごともしやってみないとわからないというのが徳島に行ってから学んだことである。

「地元のもの」といっても、当時私が住んでいた徳島市のものではなく、徳島県内の中山間地域^{*}のものを産直市で買うことにした。幸い徳島県には、スーパーマーケットのローカルチェーンであるキョーエイが「すきとく市」という産直コーナーをもっている。そのため遠くの産直市まで出かなくても、家の近くで産直野菜を購入^{こうにゅう}することができた。

「すきとく市」は、スーパーがどこかの農村で直接買い付けてきたという意味での「産直」ではなく、農家がそれぞれ個包装^{しゅつぱく}で出荷し、大きさ、個数、値段、どの販売店^{はんばい}で売るかなどを自分で決められる仕組みで成り立っている。県内各地の集荷場から届いた野菜には、生産者の名前や市町村の下町丁目まで書かれているため、なるべく過疎^{かそ}の激しそうな地域のもの、お年寄りがつくっていいようなものを選ぶのでは「これで耕作放棄が少し回避^{かいひ}できたろうか」と考えるようになっていった。

もちろん、私1人の消費ではその効果は無いに等しい。しかしこれは私自身にとっては大きな変化であった。消費のベクトル^{*}が変わったのである。通常、古典的な経済学では消費者は自分の効用を最大化させるよう行動するとされている。一方で近年注目されているエシカル消費とは、自分のためではなく社会や環境^{かんきやう}を良くすることを考えた消費者の購買行動である。農村のことを思う消費はこれと同様で、こうした食生活の開始によって、美味しいとか安いなどの「自分のため」の内向きのベクトルから、「農村や地域社会のため」という外向きのベクトルへと意識が変わったのである。

産直市で買った野菜だけで生活するのを何年か続けるうちに、日々の食事のメニューを決める主^④導権が自分にはあまりないことに気づいた。産直の野菜は地元の人が出しているため、スーパーの普通の野菜売り場のようなさまざまなバリエーション^⑤がない。徳島でつくられていないものは基本的に並ばない。全国から仕入れてくる普通の野菜売り場では、同じ野菜が長い期間売られ、その結果、多くの種類の野菜が並んでいる。それは南から北へと産地を変えるようなりレー出荷^{*}が行なわれているためだ。産直コーナーでは、一つの野菜が登場するのは「徳島での旬^{しゅん}」のみである。

このように産直では、土地と季節に縛^{しば}りがあり、並んでいる野菜は限られている。たとえば冬には大根、白菜、水菜、ホウレンソウといった野菜しか並んでいない。そうするとおのずと、並んでいる野菜を見ながら「今日は大根をどうやって食べようか」と考えるのである。「カレーが食べたいからジャガイモとニンジンと…」という食べ方ではなく、そこに並んでいるものからメニューを発想する。メニューの大元^{おおもと}を決めるのは私ではなく、土地と季節である。

X かつての暮らしはこうだったのだろう。私たちはいつの間にか人間が食べたいもの、Y 栄養学的に見て食べるべきものからメニューを決めることが当たり前になっていたのだとあらためて気づかされた。

時代が下るにつれ、便利であることや、なんでも選べることを豊かであると考えられ、現在のような、食べたいものを好きに選んで食べるという食生活が定着したのだと思う。しかしはたして、現在のほうが本当に豊かで、かつての選択肢^{せんたくし}の少ない食生活は窮屈^{きゆうくつ}なのだろうか。

私自身が数年間産直市の野菜のみで生活した結果、それは違^⑧うと断言できる。たとえば野菜の種類の少ない冬を過ごしているうち、2月くらいになるとサヤエンドウなどのマメ類や菜の花が並び始める。冬野菜に飽^あきてきたころに新たな野菜が登場する喜びと、春が来るという期待が合わさってとてもうれしい気持ちになる。春野菜は実際の気温よりも一足早く春の訪^{おとず}れを教えてくれるのがまた良い。この長い冬を越えた先にある「待ってました！」という感覚は、現在の「なんでも食べられる」食生活の一部に旬のものを取り入れてみましたという程度では味わえない喜びがある。

また、それらの野菜は旬の時期にしか食べられないため、旬が終わるまでに精一杯^{せいいつぱい}楽しむという気持ちにもなる。限られた時期にしか食べられないからこそ豊かさを感じられる。なんでも手に入るようになったことは、モノの少なかった時代には豊かな生活を与えてくれる「進歩」に思えたかもしれない。しかし、ときを経て振り返ってみると必ずしもそれが「進歩」だったとは言いきれないような気がする。

土地と季節に(Z)される野菜の選択は、もちろん楽しいことばかりではない。台風の長雨の後にはオクラしか並んでいないこともよくあった。しかし乾物^{かんぶつ}などの保存食があれば問題ない。保存食はこういう時にこそ食べるものだろう。

こうした食生活は、自分の生活が環境と結びついていること、農産物^⑨は単なる「食品」ではなく「植物」であることを実感させてくれる。それはまさに、食の「自然性」を感じる体験であった。

もう一つ気づいたのは、地球環境との関係である。2011年ごろに原油価格が高騰^{こうとう}した冬、ニュース番組でキュウリのハウス栽培^{しやうかい}をしている農家取材し、加温できないからこんなキュウリしかできないと、曲がったキュウリを映像で紹介^{しょうかい}していた。旬のものだけで

十分に豊かな食生活を送っていた私はその報道に違和感を覚えた。「そうまでして冬にキュウリを食べなくても…」。多くの人は店にキュウリがあるから、あるいはポテトサラダにはキュウリを入れるものだと思っているから、何の疑問もなく冬でもキュウリを買っている。季節を問わず野菜が手に入る状況の背景には、先述したリレー出荷のほかに、ハウス栽培の多用がある。しかしハウス栽培は加温という強制的な「季節」の調整によって実現しており、CO^{*}2を排出する行為であるハウス栽培にも「無加温栽培」というボイラーによる加温を行わない栽培方法はあるが。この一件をきっかけに、化石燃料やそれによるCO²排出の問題を気にするようになり、そこから化学肥料や農薬など、水質や土壌環境への影響についても考えるようになった。もちろんすべての化学的な資材がダメと考えているわけではない。しかし、土壌や大気、農業資材の製造過程での環境負荷など、それらが与える影響について考慮に入れたうえでの選択であるべきだろう。産直市の野菜には栽培方法に関する情報が書かれていないことが多く、実際の私の購買行動に反映させることはできなかった。それでも、食べ物の選択が農業のあり方に影響を与え、それが環境にも影響を与える連鎖をおのずと考えるようになっていった。徳島で最初に見た農村風景を「美しくない」と思ったとき、「生業の姿だから…」と、外からいろいろと言うのはおかしいのではないかと考えた。しかし農業のあり方は、農家が完全に自律的に決めているものではない。農家は、それが売れるから、求められるからつくるのである。つまり、消費者の購買行動が農業のあり方を決めているともいえる。

（真田純子『風景をつくるごはん 都市と農村の真に幸せな関係とは』）

- *中山間地域 …… 農業には不利な、山間地やその周りの地域。
- *生業 …… 生活を立てるための仕事。
- *耕作放棄 …… 農地で作物を育てないで放置すること。農村風景が壊れていく要因として挙げられている。
- *ベクトル …… 物事や考え方の方向。
- *リレー出荷 …… 複数の産地が協力して農産物を供給する出荷方法。
- *CO² …… 二酸化炭素。

問一 ――線部①「この風景」とありますが、具体的には徳島県内のどのような風景を指していますか。解答らんに続くように二十五字以内で答えなさい。（、。「」は字数に数えます。）

問二 ――線部②「疑問も浮かんできた」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア 筆者が見た農村風景は人びとの生活を正しくうつし出したものとはいえ、美しいと感じることができなかったから。
イ 筆者が見た農村風景は人びとの生きる姿を感じるすばらしいものだったが、研究してきた風景とは違っていたから。
ウ 筆者が見た農村風景は思い浮かべていたようなものではなく、美しいか美しくないかをすぐ判断できなかったから。
エ 筆者が見た農村風景は美しくないと感じるものだったが、そうした感想はその土地の人びとに失礼だと思ったから。

問三 ――線部③『地元のものだけを食べる』ということを意識的にやってみることにした」とありますが、このことによって筆者にどのような変化があったと述べられていますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 日本でつくられた野菜なら産地を問わず買っていたのが、特定の地域でつくられた野菜だけを買うようになった。
- イ 産直市の野菜をただ何となく買っていたのが、スーパーマーケットに野菜が届く仕組みを考えて買うようになった。
- ウ 徳島の耕作放棄を減らすために野菜を買っていたのが、日本全国の農村の将来を考えて野菜を買うようになった。
- エ 自分が満足することだけを考えて野菜を買っていたのが、農村や地域社会のことを考えて野菜を買うようになった。

問四 ――線部④「日々の食事のメニューを決める主導権が自分にはあまりない」とありますが、筆者は「主導権」が何にあると述べていますか。本文から五字以内で探し、書きぬきなさい。（、。「」は字数に数えます。）

問五 ――線部⑤「バリエーション」のここでの意味を本文から二字で探し、書きぬきなさい。

問六 ――線部⑥「おのずと」、⑦「窮屈」の本文中での意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|--------|--------|
| ⑥ おのずと | ア 自動的に |
| | イ 消極的に |
| | ウ 意図的に |
| | エ 自発的に |
| ⑦ 窮屈 | ア 不自然 |
| | イ 不健康 |
| | ウ 不満足 |
| | エ 不自由 |

問七

X	・	Y
---	---	---

 にあてはまることばとして適当なものを次のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア けれども イ あるいは ウ それゆえ エ なおさら オ おそらく カ どうして
- （同じ記号は二度使えません。）

問八 ――線部⑧「それは違うと断言できる」とありますが、筆者がこう述べるのはなぜですか。その理由を説明した次の文の（ ）にあてはまることばを六十字以内で答えなさい。（、。「」は字数に数えます。）

かつての食生活は現代と違って選択肢が少なかったが、（ ）から。

問九 〰線部が「影響を受ける」という意味になるように、（ Z ）に漢字二字を入れなさい。ただし、その二字は対になる漢字の組み合わせとします。

問十 ――線部⑨「農産物は単なる『食品』ではなく『植物』である」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 農産物は本来、人間が育つるから育つものではなく、地球環境によつて育まれるものであるということ。
イ 農産物は本来、人間が育てる時期を決めるものではなく、特定の時期にしか育たないものであるということ。
ウ 農産物は本来、人間が食べるためだけに作るものではなく、自然のなかで生きているものであるということ。
エ 農産物は本来、人間が食べるためだけのものではなく、人間と自然とを結びつけるものであるということ。

問十一 ――線部⑩「その報道に違和感を覚えた」とありますが、筆者はなぜ「違和感を覚えた」のですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ハウス栽培が与える地球環境への影響にはふれず、キュウリの見た目を気にすることばかり伝えているから。
イ 冬にハウス栽培での加温ができなければ、季節外れのキュウリが曲がつてしまうのは仕方がないことだから。
ウ ハウス栽培でつくられたキュウリなどおいしくないはずなのに、味より見た目だけに注目して伝えているから。
エ ハウス栽培までして曲がつたキュウリしかできないのなら、旬ではない冬にキュウリを食べる意味はないから。

問十二 ――線部「『農村風景をどう捉えたらよいか』という問い」に対する筆者の考えとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 農村風景には、リレー栽培やハウス栽培のような季節を人工的に調整することが影響を与えている。農村風景をどう捉えたらよいかを考える上では、その土地と自然がつくり出してきた美しさを、日本人一人ひとりが見つめ直していく必要がある。
イ 農村風景には、季節外れの野菜を何の疑問もなくスーパーで買う消費者の行動が影響を与えている。農村風景をどう捉えたらよいかを考える上では、農家や農業に関わる人だけではなく、私たち消費者も社会や環境について考慮する必要がある。
ウ 農村風景には、人間が進歩を求めすぎた結果引き起こされた環境破壊が影響を与えている。農村風景をどう捉えたらよいかを考える上では、地球環境への負荷を少なくするように、食生活を見直すとともに農業のあり方を探っていく必要がある。
エ 農村風景には、農家の高齢化や地域の過疎化による耕作放棄という問題が影響を与えている。農村風景をどう捉えたらよいかを考える上では、農村の風景を壊さないためにも、地元でつくられた旬の野菜を積極的に買って食べていく必要がある。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」(宮下景)は高校でバレーボール部に所属しているが、怪我をして大事な大会に出られなくなった。代わりに出場したのは同じ中学出身の北村だったが、北村は中学のとき補欠選手でほとんど試合に出ていない。その北村に、「僕」は怪我が治ってもレギュラーをとられたままだった。

日曜は一日練習だった。十六時くらいにチーム練習が終わると、僕はこっそり体育館を出た。コートの外でストレッチをするのも、空いたコートで自主練習するのも、どちらも自分の居場所じやないような気がしたからだった。

冷えた空気に身体を縮こませながら、部室に繋がる渡り廊下を歩く。練習中に体育館を抜け出してその辺をうろちよろしていたのはほんの少し前のことだが、こんなに寒くはなかった。

寒いけど、でも体育館の中よりは息がしやすかった。

部室棟はひっそりしていた。男子バレー部の部室に入り、なんとなく奥のベンチに腰を下ろす。なにをしにきたんだっけ。なににしにきたわけでもない、一人になりたかったんだ、とすぐに思い当たる。

午後の練習は、実践的なメニューが主だった。北村は遊晴や塩野と、守備範囲やブロックの位置を確認していた。北村がなるべくプレイに関わらないことがチームの最善。そう言われていた稲村東戦のときとは、まるで違った。そして僕はその姿を反対側のコートから、相手チーム役として眺めていた。こっち側にいるのは、僕以外全員一年生。態度には出さないけど、でも気を遣われているのははっきりわかる。怪我の影響がまだ長引いている先輩、もしくは怪我をきっかけに調子を崩した先輩。そういう、ちよつと腫れ物に触るような感じで見られていた。

突然、部室の引き戸がガラツと開いた。誰か来たと気づいた瞬間、バツが悪いような、恥ずかしいような心持ちがして、思わず腰を少しだけ浮かした。

「うわっ、びっくりした」

戸口に立つ北村は、扉に手をかけたまま声を上げる。

「……なにしてるの、こんなところで」

「いや。なんか取りにきたの?」

僕は北村の顔を見ないようにしながら、またベンチに座った。ゴムチューブを探してて、と北村は答えて、壁際のラックを漁り始める。肩の筋肉を鍛えたりするときに負荷を加える道具で、いま北村が顔を突っ込んでいる場所ではなくその上の段にあると僕はわかっていたが、あえて口にしなかった。

怪我した日の夕方、あのときも部室で僕は北村と二人きりになった。遠い昔のように思える。一カ月以上前だから、実際遠い昔だ。北村が、あった、とラックに突っ込んでいた手を引き抜いたとき、僕の脳裏には「バレー部に入ってて本当よかった」というこの間の柿間さんの言葉が浮かんでいた。

「……北村はなんで、高校でもバレーを続けたの?」

北村は怪訝そうに振り返る。

「なに、いまさら」

「気になった。いまさら」

「去年の合宿でも聞いてきたよね、それ」

去年のゴールデンウィークの合宿で、ごうんごうんと震える洗濯乾燥機の前で、たしかに僕は同じことを訊いた。でも北村の答えは覚えていなかった。

「あのとき、お前ちゃんと答えなかったでしょ」

「いや答えたよ、景が覚えてないだけ」

「なんて言ってたっけ」

「バレーやりたかったから」

僕は顔を上げて北村を見て、すぐその手の中のゴムチューブに視線を逸らした。

北村は口を閉ざしたまま笑った。僕と自分自身、両方向に放たれた嘲笑に思えた。

「俺、変なこと言ってるやないよな。俺がバレーしたいって言うの、そんなに意外かな」

「そりや意外でしょ」

気を遣うつもりはなかったから、僕は即答した。「中学のときは、試合なんかまったく出てなかったんだから」

北村はしばらく黙して、右手の指を親指から一本ずつ、左の手で揉んだ。今日の練習中に負傷したのか、小指が少し変色し、腫れているように見えた。

その小指に触れてから、北村は口を開く。

「中学の最後の試合に、俺が出たの覚えてない？」

中三の夏の記憶を辿った。かなり遠くに霞んでいたが、ひどく暑い日だったこと、僅差で負けたこと、それと中学三年間で一番のスパイクが打てたことは覚えていた。打球を弾いたレシーバーの顔も思い出せるような気がする。でも北村がコートにいたことは、言われても思い出せなかった。

そりやあ景は覚えてないか、と北村は笑った。

「出たんだよ、試合に。ピンチサーバーで。ほんと些細なプレイだったけど。俺がサーブ打ったあと、相手レフトからスパイクが打たれた。ブロックに当たって跳ねて、俺の少し右の方に飛んできた。俺は走って、腕を伸ばして、拾った。ボールは綺麗にセッターに返った。セッターだから丸ちゃんだよ。いまなにしてんだろ、あいつ。高校どこだったっけ？」

「……それで？」

「ああ、それで丸ちゃん景にトスを上げた。景はそれを決めた」

北村は、淡々とした口調で続ける。

「俺のレシーブが繋がって、得点になって。景からしたら、それがどうしたって感じだろうけど、なんて言うんだろう、自分がチームに参加している感じがすごくして、気持ちよかった。久しぶりにバレーを楽しいと思った。その瞬間まで、中学でバレーなんかやめてやるつもりだったけど、あの一点があったから、高校でもバレーやろっかなって気になった」

ただの一点。些細なプレイ。セットポイントでも、逆転の一手でも、流れを引き寄せた得点でもなく、そもそも自分で決めたわけでもない。でもそれだけで景色が一変する感覚は、僕も知っていた。いや正確に言えば、知っていたはずだった。

「だから入りたてのころは結構モチベーションもあったんだよ。最初の合宿で景が試合に出たじゃん？ あのと、中学から知ってる景が高校でも通用してるの見て、嬉しかった。俺もやるのかもって思った。まあ全然だったわけだけど」

またあの合宿の話かよと思ったが、同時に、コインランドリーで話したとき北村がスプライトを飲んでいたことを思い出す。なにかいいことがあった特別な日には、バランスを取るために苦手な炭酸を飲む、という北村の変な癖だ。

「最近景の代わりに試合に出て、それで何回かまた楽しいって思える瞬間があった。そのおかげで、俺はバレーが好きなんだって、ちゃんと思い出せた」

バレーが好き。バレーしたかった。景と一緒に。北村の発した言葉は奔流となつて頭の中をかき乱し、次第にこの部室みたいに雑然としてきて、わけがわからなくなってくる。

「景」

北村が躊躇いがちに放った一言で我に返った。北村は扉の前で振り返る。

「……あんまり俺のこと、舐めないでほしい」

透明な手で平手打ちを受けたように感じた。全身の筋肉が一度に硬直する。透明な手はそのまま僕の肩を掴んで、押さえつけてきて、僕はそのせいで身じろぎ一つできなかった。

北村は部室を出ていく。夕闇に沈んだ近くの木立で、小鳥が叫ぶように鳴いた。

（坪田侑也『八秒で跳べ』）

＊遊晴や塩野……景と同年の部員で、遊晴はチームのエース、塩野はキャプテン。

＊稲村東戦……景の代わりに北村が出場した試合。大差で負けた。

＊柿間さん……一つ上の学年の先輩部員。すでに部活動を引退している。

＊ピンチサーバー……本来サーブを打つ人に代わってサーブを打つ人。なお、サーブとは相手コートに向かって打つ最初のプレイ。

＊嘲笑……ばかにして笑うこと。

＊奔流……激しい勢いの流れ。

問一 ～線部 a「ながら」、b「られ」と同じはたらきをするものを次のア～エからひとつずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「ながら」				b「られ」			
ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ
昔ながらの町並みを歩く。	先に出ておきながら遅れてしまった。	我ながら情けないことだ。	食べながら歩くのはやめなさい。	このりんごはまだ食べられています。	家の窓は閉められています。	昼食はもう食べられましたか。	病気の祖父が案じられます。

問二 ―線部①「一人になりたかったんだ」とありますが、なぜ「僕」はこのように感じているのですか。その理由として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 体育館で部員たちとレギュラーを争うのが息苦しいから。
イ 体育館での練習を厳しくつらいものだと感じているから。
ウ 体育館で他の部員と過ごしていても心が落ち着かないから。
エ 自主練習を体育館以外の場所でこつそりとしたかったから。

問三 ―線部②「まるで違った」とありますが、どのように違ったのですか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア チームプレイから遠ざけられていた北村が、チームのメンバーに何でも言えるようになった。
イ チームプレイから遠ざけられていた北村が、チームの一年生にまで心配されるようになった。
ウ チームプレイから遠ざけられていた北村が、チームのまとめ役として動けるようになった。
エ チームプレイから遠ざけられていた北村が、チームの一員として認められるようになった。

問四 ―線部③「腫れ物に触るような」、⑧「淡々とした」の本文中での意味として最も適切なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ③ 腫れ物に触るような
- | | |
|---|-----------|
| ア | 恐る恐る接している |
| イ | 嫌々つきあっている |
| ウ | 納得がいつていない |
| エ | 同情を覚えている |
- ⑧ 淡々とした
- | | |
|---|-------|
| ア | なげやりな |
| イ | 冷静な |
| ウ | 礼儀正しい |
| エ | 注意深い |

問五 ―線部④「北村の顔を見ないように」、⑤「あえて口にしなかった」とありますが、「僕」はなぜこのような行動をとっていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 北村に自主練をされると、レギュラーからさらに遠ざかってしまうと思っているから。
イ 北村にレギュラーをとられたことで、自然に接することができなくなっていたから。
ウ 部室に北村をひきとめることで、以前から気になっていることを聞きたかったから。
エ レギュラーをとられた北村に、バレーへの気持ちたちが冷めたことを知られたくないから。

問六 ―線部⑥「そりや意外でしょ」、⑦「そりやあ景は覚えてないか」について、Hさんは考えを整理するためのノートをつくりました。（Ⅰ）・（Ⅱ）にあてはまることばを、それぞれ指定字数以内で答えなさい。（、。」「は字数に数えます。）

【景】の言葉 「そりや意外でしょ」

【北村】の言葉 「そりやあ景は覚えてないか」

（この表現にこめられた気持ち）：：当然だ、あたりまえだ

←

←

二人がそれぞれ考えていること

【景】――北村が（Ⅰ 四十字以内）（ことは当然意外だ。

【北村】――（Ⅱ 二十字以内）（ことを、景が覚えていないのは当然だ。

問七 ―線部⑨「それだけで景色が一変する感覚」とありますが、これはどういう感覚ですか。それを説明した次の文の（ ）にあてはまることばを三十字以内で答えなさい。（、。」「は字数に数えます。）

些細なプレイであつても自分が拾ったボールがつながることで、（ ）

（ ） 感覚。

問八 ―線部⑩「透明な手で平手打ちを受けたように感じた」について、先生と生徒たちが話しています。A にあてはまることばを十字以内で考え、B にあてはまることばを本文から十五字以内で探し、書きぬきなさい。（、。」「は字数に数えます。）

- 先生 景はこのとき、どのような気持ちだったのでしょうか。
- Aさん 私は「平手打ちを受けたように」という表現から、かなりのショックを受けていると感じました。
- Bさん どうして景はそんなにショックを受けているんだろう。
- Aさん それは、景が A とは自分で思ってもいなかったからだと思います。
- Bさん 本当に、自覚していなかったんだらうか。
- Cさん 自覚はしていなかったんだらうけれど、心のどこかではそう思っていたんじゃないかな。
- 先生 Cさんはどの表現からそう考えましたか。
- Cさん 「北村の答えは覚えていなかった」、「 B 「北村がコートにいたことは、言われても思い出せなかった」です。
- 先生 なるほど。そのように考えると、「身じろぎ一つでできなかった」景の心情にも近づくことができましたね。

問九　……線部A～Eの表現を説明したものとして適当なものを次のア～オからすべて選び、記号で答えなさい。

ア　……線部A「遠い昔のように」には、怪我をしてからの「僕」の普段とは異なる時間の感じ方が表れている。

イ　……線部B「ごうんごうんと震える洗濯乾燥機」には、不安定にゆれ動く「僕」と北村の関係が表れている。

ウ　……線部C「その小指に触れてから」には、「僕」からレギュラーをうばった北村の自信と誇りが表れている。

エ　……線部D「この部屋みたい雑然と」には、北村との会話によって生じた「僕」の動揺と混乱が表れている。

オ　……線部E「夕闇に沈んだ近くの木立」には、「僕」に気持ちをほつきりと伝えた北村の後悔が表れている。

三　次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、必要な場合はひらがなで送りがなも書きなさい。

- 1　社会に大きなヘンカクをもたらす技術。
- 2　試合開始直後、電光セツカの得点が決まった。
- 3　オサナイ妹たちの面倒を見る。
- 4　母の声にコオウして赤ちゃんが笑い出す。
- 5　久しぶりにツウカイな小説を読む。
- 6　会社のソンボウをかけた企画を考える。
- 7　多少の遅れならシヨウはありません。
- 8　組み立ての手順をアヤマル。
- 9　教科書の作品をロウドクする。
- 10　無我ムチュウでゴールまで走りぬける。

問

問三

問四

問五

⑦

7

問七
X

Y

Y

問八

156

1

7

7

問 二

a	
---	--

11

10

問三

問四

③

1101

1141

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

1000000

	6 ソ ン ボ ウ		1 ヘ ン カ ク
	7 シ シ ヨ ウ		2 セ ツ カ
	8 ア ヤ マ ル		3 オ サ ナ イ
	9 ロ ウ ド ク		4 コ オ ウ
	10 ム チ ユ ウ		5 ツ ウ カ イ

受 験 番 号

施	四	い
設	角	る
栽	い	
培	建	
用	物	
の	が	風景。
真	点	
っ	在	
白	し	
で	て	

問一	ア
問二	エ
問三	イ

問四	土地と季節
問五	種類

問六⑥	ア
⑦	エ
問七X	オ
Y	イ

問八
かつての食生活は現代と違って選択肢が少なかったが、

問九	左右
問十	ウ

問十一	ア
問十二	イ

季	の	や	べ	杯	さ
節	野	、	ら	楽	を
の	菜	旬	れ	し	感
訪	が	の	な	も	じ
れ	登	時	い	う	ら
と	場	期	野	と	れ
と	す	に	菜	い	た
も	る	し	を	う	
に	喜	か	精	豊	
旬	び	食	一	か	
					から。

二	問一	a	エ
	問二	b	イ
	問三		エ

問四③	ア
⑧	イ
問五	イ

Ⅱ	中学最後の試合で自分
---	------------

問六Ⅰ	中学のときには試合にま
-----	-------------

問八A	北村を見下している
-----	-----------

B	気持ちを遣うつもりはなか
---	--------------

問七	些細なプレイであっても自分が拾ったボールがつながることで、
----	-------------------------------

問九	ア、エ
----	-----

1	ヘンカク	変革	6	ソンボウ	存亡
2	セツカ	石火	7	シシヨウ	支障
3	オサナイ	幼い	8	アヤマル	誤る
4	コオウ	呼応	9	ロウドク	朗読
5	ツウカイ	痛快	10	ムチュウ	夢中